

もうひとつの労働運動は可能か？

―書評『反抗する一般組合員 長い七〇年代の労働者戦闘性と下からの反乱』（第三部）

マット・ノイズ 明治大学経営学部特任講師

翻訳 山崎精一 明治大学労働教育メディア研究センター客員研究員

目次

- 第一部 次の大高揚と最後の大高揚（前々号掲載）
- 第二部 突然の厳しい引き締め（前号掲載）
- 第三部 これが一般組合員の反抗だ（今号掲載）

本稿はアメリカの一九七〇年代の労働運動の高揚を担った一般組合員の反抗とそのなかでの左翼の役割を評価しようとする書評である。書評の対象は『Rebel Rank and File: Labor Militancy and Revolt from Below in the Long 1970s』Aaron Brenner, Robert Brenner, and Cal Winslow, eds. New York: Verso, 2010. 393 pages である。前々号では同書の紹介と戦後アメリカ労働運動の大きな波を概観し、前号では七〇年代の政治経済を分析した。今号第三部では一般組合員の反抗の個別事例を取り上げる。執筆者のマット・ノイズは八〇年代末からアメリカで一般組合員の労働運動に参加し、現在も労働組合民主主義協会などの活動に携わる日本在住の労働運動研究者・教育者である。

第三部 これが一般組合員の反抗だ

「運動の持続性と強さはその源となる怒りにより規定される」（バート・コ克蘭、一九七九年）

「運動の参加者は何に怒っているのか？ 何を要求しているのか？ この運動はどこまで行くのか？」これらウォール街占拠運動に投げかけられる質問は社会運動では常に発せられる質問である。『反抗する一般組合員』は長い七〇年代の一般組合員の反抗を生み出した「怒りの源」、その要求、その運動の力と最終的な衰退を理解する手助けとなる。

同書は様々な労働組合や産業、つまり農業労働者、鉱山労働者、チームスターズ（運転手）、教師、電話電信労働者、自動車労働者、客室乗

務員、事務労働者、家事労働者の労働者戦闘性と反抗の事例研究をバランス良く取り上げている。その各章は反抗の異なる様相を明らかにしている。A・C・ジョーンズとキラン・テイラーによる自動車労働者の章では自動車産業の職場と社会を覆っていた人種差別と非人間的な労働条件を描いている。マージョリー・マフィーは教員の二つのストライキを取り上げ、戦闘的な一般組合員が黒人の地域社会を支持するために組合のピケラインを超えねばならなかった事情を検討している。共同編集者のアロン・ブレナーはこの時期の最大のストライキが行なわれたニューヨーク電話会社での技術革新をめぐる闘いを丹念に描いている。ドロシー・スー・コプルは伝統的に女性が行なってきた仕事でのアイデンティティと雇用を確保する闘いの中に労働陣営にとつての「新しい理想」を見出しており、魅力的ではあるが、一般組合員の反抗という全体のテーマには沿っていない。各章はくわしく見る価値があるが、ここでは三つだけを取り上げる――「民主化を求める鉱夫たち（MFD）」、全米農業労働者組合と「組合民主化を求めるチームスターズ（TDU）」。

労働左翼

社会主義者、共産主義者、無政府主義者、アナールコサンジカリスト、キリスト教社会主義者、

ユートピア主義者などの左翼は一九世紀初頭からの米国の労働・社会史で中心的な役割を果たしてきた。マーカースイズムによる被害が労働組合ではとくにひどかったにもかかわらず、長い七〇年代でも例外ではなかった。労働組合の中の強い反共主義と、社会主義者の役割とそうでない者の果たした役割を区別することに対する当然の反発から、戦後労働運動の中での革命派や急進的活動家の貢献はほとんど言及されてこなかった。幸いなことに六〇年代世代の人たちが退職する時代になり、あるいは過去を振り返る時期になったので、左翼活動家たちは自らのことを語り始め、米国社会史の「失われた章」を書き始めている。

『反抗する一般組合員』もこの方向で控えめな一歩を歩み出しているが、左翼に関してはついでに触れている程度に過ぎない。例外はダン・ラボッツの「七〇年代のチームスターズ労働の動乱」と題する章である。ラボッツは国際社会主義者党の「一般組合員戦略」と呼ばれることになった左記の要約を紹介している。国際社会主義者党は『反抗する一般組合員』で取り上げられている闘いの多くでもっとも重要な役割を果たした左翼団体であり、同書の執筆者や編集者の多くが所属していた団体である。この戦略は国際社会主義者党のめざしたものを明らかにしており、長い七〇年代を通じて発展していったので、長い引用する価値がある。

「ビジネス・ユニオニズムの指導者たちが経

営者側の挑戦に 대응することに失敗したので、それに替わるものが求められるはずである。急進的活動家は労働組合の中に一般組合員のコーカスを組織することにより労働運動の中の階級闘争の傾向を組織し始めることができるだろう。コーカスは職場での苦情申し立て、協約改訂闘争などの集団的な行動の先頭に立ち、そのことにより経営と政府に対する労働者の意識を変革し、労働者の自信と力の自覚を高めるだろう。このような闘いを通じて労働者は、もっと戦闘的な行動と組合内部の民主主義を求める闘いを受け入れるようになり、さらに社会主義思想をも受け入れるようになるだろう。国際社会主義者党は下から社会主義という同党の考えに共鳴する組合活動家の層を結集しようと考えていた。そのような組合活動家が革命的な社会主義政党の中核を形成すると考えられていた」(二二四頁)。

国際社会主義者党はトロツキー主義の流れの一つから生まれ、カリフォルニア大学バークレー校の教授だったハル・ドレーパーの理論と組織化により形成された。ドレーパーの「独立社会主義クラブ」は「民主社会学生同盟(SDS)」の会員に大きな影響力を持ち、その学生たちが国際社会主義者党を結成した。ドレーパーの思想はその一九六六年の古典的作品「社会主義の二つの魂」に一番良く表現されている。同書は社会主義のなかで歴史的に支配的な潮流が反民主主義的であることを認識し、「修正主

義的」あるいは「スターリン主義的」な形態の「上からの社会主義」に対する、革新的民主的な「下からの社会主義」を組織する必要を主張していた(そこから官僚主義への批判と労働組合での一般組合員の役割が強調されていた)。

他の多くの国と同様に、米国の社会主義的左翼は分裂や内部闘争に苦しみ、そのめざした各自の思想は異なっていたが、皆ほとんど力を失い、反動的な役割を果たすことさえあった。その一方、革命派は人種差別や戦争に対する闘いでは重要な役割を果たし、多くの人にとって労働組合が保守と体制維持の権化のように見えた時に職場での組織化と組合改革の重要性を頑固に主張し続ける役割を果たした。

この時期の左翼政治で皮肉なのは、当時の若い急進的活動家、とくに国際社会主義者党のように一般組合員の運動を築くことに焦点を当てていた団体のメンバーにとって、その革命組織が労働者を党に入れるための組織としては機能せず、むしろ革命派を労働運動に導入するための組織となった点である。一部の者はこの革命的な社会主義目的の「清算」を批判(今も批判)しているが、若い革命派の人たちは現場の仕事につき、その多くが労働者組織化を何十年にもわたり学び続けたのであり、『反抗する一般組合員』はそのような重要な貢献の実例を提供している。

全米農業労働者組合の戦闘性と独裁

フランク・バーダキの全米農業労働者組合に関する注目すべき論考では、社会運動と労働団体を複合した組織として有名なこの組合を取り上げている。バーダキは学生運動、反戦運動の経験者で、全米農業労働者組合の職場委員を務め、公立学校の教師や「組合民主化を求めるチームスターズ」の会員でもあった。「全米農業労働者組合を末端から見ると題するバーダキの論考は、労働組合とNGOを複合したような全米農業労働者組合の組織がどのようにストライキとボイコットなどの職場外の戦術の組み合わせの成功の結果生み出され、しかし最終的には組合の衰退に繋がったかを描いている。この「二つの魂を持つ」組織構造が一般組合員からの統制から指導部を隔離し、労働者の参加を封じ込め、組合内民主主義を掘り崩した。バーダキは全米農業労働者組合の一般的な捉え方に異論を提起しており、その組織と戦略について彼が提起している問題は現在の労働者センターなどの地域に基盤を持つ労働者組織の活動家たちにとって関心事であるはずである。

全米農業労働者組合は長い七〇年代でもっとも有名な組合の一つであり、その委員長セザール・チャベスは労働運動でもっとも尊敬されている英雄の一人であり続けている。食用ぶどうのボイコットを盛り上げるために二五日間のハ

ンガーストライキを行なったチャベス委員長とケネディ大統領が並んで立っている姿はこの時期の偶像であった。農業労働に携わる季節労働者と移民労働者が従事する産業は今でも、「自然のリズムが生産の速度を支配している」ことが農業労働者の大きな優位点となる。「収穫できなければ、それ以前に投資された資金と一緒にすべてが失われる」(二五一頁)。一時的な労働力不足もまた「一時的に賃金を引き上げる」要因となった。新鮮な果物や野菜を収穫するのは「熟練するのに何年もかかる」熟練労働であり、個人の能力だけではなく「組」になって働く労働者、通常は家族の集団的な技能に頼ることが多かった。

バーダキの描く農業労働者は、ボイコット運動を通じて「全米農業労働者組合が広めた弱い農業労働者のイメージからは遠い存在」だった。その労働は不安定で労働法によって保護されていなかったが、「彼らは収穫ストライキ、スローダウンや農業サボタージュの様々な形態に通じていた。賃金をその場で再交渉して決めるまで農地に入ることを拒否することもあった。全米農業労働者組合ができる前から農業労働者たちは短期間の就業拒否(パロス)、スローダウン(亀計画)、サボタージュ(豚計画)、収穫すべき野菜を飛び越えて取り残したりする戦術(カンガル計画)を行っていた。農業労働者がこれらのアイデアを全米農業労働者組合のスタッフに教えたのであって、その逆では

なかった。「普通のストライキについてもカリフォルニアの農業労働者は長い経験を持っていた」とバーダキは記している。

この産業の季節的な性格は労働者に一定の力を与えたが、同時に持続的な組合組織を確立することを困難にしていた。「毎年労働者たちは新たに組織化しなければならなかった」。さらに農村地域の移民社会のなかで暮らし、働く彼らは、移動することも多く、他の労働者からは肉体的、組織的、文化的に孤立していた。

したがってバーダキの見解によると、全米農業労働者組合の大きな貢献は「カリフォルニアの農業労働者の孤立を終わらせ、米国の都会の同盟者となし、収穫時の季節的な力に長期的な組織力を付け足す組合組織を確立する手助けをしたことである。農業労働者の戦闘的活動家はもはや孤立していなかった」。

これが可能になったのは消費者ボイコットという型破りの戦術の行使によってであった。一九六五年に食用ぶどう(ワインやジュース用のぶどうとは違う、食べるためのぶどう)の農園主に対するストライキに敗北した時に、チャベスは「ストライキを象徴的に継続し、全国に広め、ボイコットを開始して」農園主を農園ではなくスーパーマーケットで圧力を掛けることを選択した。全米農業労働者組合は「ボイコット戦術を再生させ、公民権運動により開かれた新しい政治的機會を」利用した(五四頁)。ぶどうボイコットは単なる労働争議ではなく人間の

尊厳を求める公民権運動だった。

どうボイコット成功（チャベスは主要な農園主と一九七〇年に協約を調印した）は意外な影響を生んだ。全米農業労働者組合は戦術を戦略原理に高めた。「組合の基本的な力は農園にいる労働者ではなく、都会の支持者の中にあつた」（二五六頁）。都会での強いボイコット組織を作るために全米農業労働者組合の指導部はボランティアを組合員にして「大会での投票権を与えた」。チャベスとそのスタッフは新しい戦略に対応する「組合組織構造を確立した」。それは「ローカル組織を作る考えを退け、チャベスにより指名されたスタッフによる現場事務所」を作ることを選択することであつた。労働者は大会で最高指導部を選出する権限と、現場で労働者を代表する農園委員を選出する権限は持つていた。しかし、農園委員は皆フルタイムの農業労働者であり、組合のスタッフが設定する組合の方針に対しては何の力も持つていなかった。

全米農業労働者組合の指導者とスタッフは運営上の権威を持つていただけではなく、「組合費とは別に独自の収入源を持つていた」。どうボイコットの間に全米農業労働者組合は「慈善寄付団体のネットワーク」を確立し、民間基金や米国政府からの補助金とともに、「裕福な個人、労働組合、教会団体」からの寄付金を得ることができた。また協約を締結した農園主も全米農業労働者組合に金を支払わなければなら

なかつた。このやり方により指導部は一般組合員に依拠する度合いを減らし、「全米農業労働者組合の組合内民主主義の力関係に長期的影響」を与えることになった。

一九七〇年のどうボイコットの勝利の後に一連のストライキとボイコットが続き、それを通じて指導部はその複合手法を推し進め、労働者は農園での獲得物を拡大する機会を得た。農園での戦闘性の高まりは一九七四年の「津波ストライキ」で頂点に達した。全米農業労働者組合の指導部は対立労働者のチームスターズ労働者を産業から追い出そうとして（チームスターズ労働者は全米農業労働者組合を破壊するために農園主が呼び込んでいた）、またカリフォルニア州の農業労働者にとつてのワグナー法のような新しい農業法を作ろうとして、全米農業労働者組合に加入していい労働者にもストライキするよう働きかけた。「農園での混乱」、収穫を失う恐れと全国的ボイコットの可能性に直面してカリフォルニア州の農業ビジネスは屈服し、リベラルな州知事ジェリー・ブラウンのもとでカリフォルニア州農業労働関係法（ALRA）が成立した。「この新法は米国で一番労働組合に有利な法律であつたし、今でもそうである」とバーダキは述べている。それは巨大な勝利だつた。四年後、チームスターズ労働者は「農園から撤退した」（二六一頁）。

ボイコット運動の時そうだったように、州の政治と深く関わるにより、指導部は「農

園で起こっていることとかけ離れてしまった」。農園の現実から切り離された「全米農業労働者組合の最高指導部とスタッフの生活は少しおかしくなつてしまった」。組合の歴史の中で一番奇妙な挿話は指導部がシナノンという団体が考案した「攻撃的セラピー課程」に一年半も参加したことだつた。その団体は「七〇年代のカリフォルニアで花咲いた対抗文化のなかでも危険なカルトの一つであつた」（二六一頁）。組合内民主主義は犠牲となり、「開かれた議論は抑えられ、反対意見は裏切りとされ、左翼は追放され、指導者とスタッフは一層内向きになつていった」。

農園主たちは反撃し一九七九年には攻撃に転じ、「農業労働者に対する監督や支配人の支配を強め」ハイヤリングホールを廃止しようとした。組合役員は当初はハイヤリングホールを諦め「ワーク・ルールの変更も認めるつもりだつた。しかし、労働者たちは譲歩を拒否し、全米農業労働者組合は一番弱い会社を標的とする部分的ストライキを敢行し、主要な野菜農園主の親会社である多国籍資本のユニテッド・ブランズ社に対する戦術としてカリフォルニア産以外のバナナに対するボイコットも行なつた。再度組合の「二心室の心臓」つまりボイコットとストライキが「見事なシンコペーションで脈打ち始めた。ストライキ労働者たちが農園を担当し、チャベスや組合スタッフが都会を担当した」（二六四頁）。

ストライキに入って七ヵ月後に開かれた組合大会でチャベスはストライキ委員会が彼のボイコット中心の戦略を認めるよう説得しようとしたが、労働者たちは抵抗して、「ストライキ、ストライキ、ストライキ」と連呼した。これに對してチャベスが支配する執行委員会は「ボイコット、ボイコット、ボイコット」と返した（二六七頁）。大会後、チャベスは「組合はボイコット計画を推進し、ストライキは直ぐには

一九七九年のストライキの成果の一つは「有給組合代表」の創設だった。これは全米自動車労組の「委員 (commitmen)」のように組合員により選出されるフルタイムの組合代表で、農園主により給料が支払われた。ストライキ委員会のメンバーの多くがこの有給組合代表に選ばれた。これらの有給組合代表は「上の人」からではなく「下の人」から選ばれていてため、全米農業労働者組合の中の反対派の新しい基盤となった。チャベスはストライキ委員会を支持したスタッフを「追い出して」、反対派を排除する行爲に出た。一九八一年の大会で有給組合代表たちは候補者グループを作って立候補した者が、大差で敗北した。チャベスはその立候補した者を有給組合代表からリコールするためにスタッフを張りつけ、最後には組合規約に違反して有給組合代表を解雇してしまった。

全米農業労働者組合がこの内部対立を克服してもっと民主的な内部文化を發展する可能性が

組合のない会社との競争に敗れて廃業する会社もあり、効果的な組織をその場で持たない「労働者は立て直して反撃できる状況ではなかった」。「労働組合の農業労働者魂はすでに深手を負っていたが、最終的に死んでしまった。残ったものは一連のNPOにより物質的に支えられ、過去の勝利の懐かしい記憶により精神的に支えられたキャンペーン魂だけだった。全米農業労働者組合は労働組合としては存続せずむしろ農業労働者支援団体と家族ビジネスの複合体として存続している」(一六九頁)。

2012/02/09 10:11:40

働者代表は後に組合に対する裁判に勝利した)によって、すぐに「反撃できない状況」になってしまったのか? 労働者たちは自分たち自身の戦闘的な指導部を持たなかったのか? 労働者たちは仕事の上では力を持っていたにもかかわらず、組合の中では「弱い貧農」で有給労働者代表に全面的に依存していたのか? 一般組合員は全米農業労働者組そのものの創設の時もそうであったように、民主主義のための闘いにおいても主要な役割を果たしたに違いないのだが、バーダキの論考の終盤には一般組合員は登場してこない。

心の中の炎 MFD

ポール・J・ナイデンの「全米鉱山労組の一般組合員運動 六〇年代初期から八〇年代初期まで」の中心的課題も民主主義の問題である。しかし、農業労働者の場合とは違い、労働組合の外の団体、とくに炭肺協会が一般組合員組織の発展と存続にとってきわめて重要だった。

ウェスト・バージニア州チャールストンのチャールストン・ガゼット紙の調査記者であり編集者でもあるナイデンは全米鉱山労組のなかでの民主主義と権力を求める特筆すべき闘いの物語を展開している。そこで描かれているのは、組合改革をめざす人たちが一般組合員の組織を維持し育て、組合民主主義を拡大することに失敗したために、改革運動が弱体化し、独自組織

という大切な手段なしに闘わざるをえなくなった労働者たちの姿である。

長い七〇年代の反抗を象徴する労働組合、一般組合員の運動を一つ挙げるとすればそれは間違いなく全米鉱山労組と「民主化を求める鉱夫たち(MFD)」である。全米鉱山労組の高名な委員長でありCIOの指導者でもあったジョン・L・ルイスは典型的な交換取引手法により、鉱山主たちに「生産性向上へのフリーパス」を与えた。ルイスは自らの権力を固めたが、「鉱山労働者が払った犠牲は巨大なものだった」。失業が急増し、「戦闘的な安全委員たちを組合指導部が守ろうとしなかったために」安全性が低下した(一七七頁)。ルイスのもとの全米鉱山労組は非常に独裁的だった。ルイスは反対する者を素早く排除し、「交渉過程を完全に個人的に支配する」ようになった、とナイデンは語っている。その秘密交渉には鉱山主側の一人とルイスの二人だけで行なわれるため「神秘的交渉」と呼ばれていた(組合員は交渉の批准投票をしたことはなく、交渉が妥結して初めてその内容を知らされた)(一七八頁)。

一九六三年にはルイスが選んだ後継者のトニー・ボイルが委員長になった。ボイルはルイスの独裁的なやり方と生産性と交換取引する戦略を踏襲したが、我慢できなくなった鉱夫たちは協約に抗議して山猫ストライキを一九六四年と一九六六年に打った(一七九頁)。一〇年にわたって急上昇する生産性、高い失業率と危険

な労働条件により反抗は持続した。六〇年代末から石炭に対する需要が再度高まり、それと共に炭鉱の雇用が拡大するにつれ、労働者の自信と影響力が高まった(一七八頁)。安全衛生が怒りの一番根源的な原因だった。一九六八年にウェスト・バージニア州の炭鉱の爆発で七八人が死亡し、その結果「一九六九年一月に炭肺協会が結成され、一九六九年二月三月の炭肺ストライキ」が起こり、四万五〇〇〇人の鉱夫たちがナイデンによると「現代の労働史の中でもっとも重要な政治ストライキ」を敢行した。

ボイルは指導部内部からも挑戦を受けた。一九六九年の全米鉱山労組の選挙ではジョセフ・ジョク・ヤブロンスキが袂を分かち対立して委員長に立候補した。ヤブロンスキに対する一般組合員の広い支持も、組合外の親組合のインテリたちの注目も、全米鉱山労組の腐敗を克服するには不十分だった。ボイルは不正選挙により勝利し、その三週間後、ヤブロンスキとその妻と娘はボイルに命令された殺し屋により自宅で射殺された。

怒った鉱夫たちはMFDを結成し鉱夫たちとその家族の「沸きあがる戦闘性は素晴らしい選挙戦に注ぎ込まれた」(一七八頁)。ヤブロンスキの暗殺から二年後、MFDは「米国でもっとも腐敗し、根深い組合官僚制を一般組合員の役員候補者団により追放することに成功したのだった」。この時期全体を通じて全国労組で一般組合員の改革グループが組合権力を握った唯

一の例だった（一八〇頁）。

この勝利は民主主義と一般組合員の組織にとって真の勝利を意味していた。「数十年ぶりに働いている鉱夫たちが大会運営を支配し、組合規約の大きな改革を実現した」。「全米鉱山労組の八四年間の歴史の中で初めて」協約批准投票の権利を獲得し、安全部門と組織部門を「拡大強化した」。まずいことに、鉱夫たちは組合の反共産主義条項をそのまま残し、「組合の中の人種差別主義とその影響と闘う」ために行動することができなかった。一般組合員の運動に敵対する者たちはこの失敗をすぐに利用することになる（一八〇頁）。

ボイルは委員長ではなくなったが、彼とその前のルイスが築いた機構はすぐには解体されなかった。ボイルの支持者たちは執行委員会に留まり、副委員長でMFDの指導者だったマイク・トルボビッチのような人を「自分たちの側に取り込み始めた」。トルボビッチは仲間の組合役員たちを共産主義者のシンパだとして攻撃した。同時にクークラックスクラウンのような反労働組合、人種差別団体も炭鉱街で組織化していた。興味深いことに、全米鉄鋼労組はボイル支持者の運動を財政的に支援していた一方、MFDはその全米鉄鋼労組の中の反対派のエド・サドロフスキのような人を支援していた。

しかし、ナイデンによればMFDを滅ぼしたのは内部分裂でも外部圧力でもなく、「一般組合員中心の組合運動への献身性」の欠如だった。

「その意図は、下からの一般組合員の力を強めることをめざして組合を再組織化することではなく、改革の人的な手段として組合員を利用することであった。『MFD』を率いた組合役員たちは、本質的には伝統的な組合改革者であった」（一八五頁）。

MFDの指導者たちが辿った道は長い七〇年代の反抗の典型であり、例外ではなかった。「六〇年代から七〇年代にかけて労働運動の至るところで一般組合員から支持された一連の造反により組合最高指導部が交替させられた。しかし、その新しく選出された改革派の役員たちは一般組合員による管理を受け入れたり、一般組合員の独立した戦闘性を育てたりすることはまったくなかった」（一八六頁）。

一般組合員の鉱夫たちは自らの組織化により訓練され、炭肺協会のような団体により支持されていたので分解することはなかった。「自分たちの要求に応える新しい指導部を樹ち立てるのに失敗した一般組合員の鉱夫たちは直接行動により問題を解決するしか選択肢がなかった」。会社が五段階の苦情処理手続きを意図的に利用して苦情処理の引き伸ばしを図ったので、七〇年代中頃には鉱夫たちは「九〇〇〇件の山猫スト」を組織した。会社は「違法」なストライキを阻止しようと裁判に訴えたし、全米鉱山労組のアーノルド・ミラー委員長は職場復帰を命じたが、鉱夫たちはストライキを拡大し、一九七五年には八万人が参加した「ストライキ権ス

ト」を取行し、一九七六年には一二万人が参加して「差し止め反対」ストライキが取行された。鉱夫たちは「ストライキにかかわるすべての罰金、差し止め命令と刑事罰の脅かしを連邦裁判所の判事に撤回させることにより歴史に名を残した」（一八七頁）。

鉱夫たちはその直接行動を組合の中にも持ち込んだ。一九七六年の組合大会で、翌年の協約交渉でミラー委員長が譲歩してしまうのを防ぐとして代議員たちは「協約案文を大会議場で一字一句書いたが、これは一般組合員の直接民主主義の驚くべき表現だった」。一般組合員の組織なしにこれが行なわれたという事実は、一般組合の参加の深さと幅広さを示している。

鉱夫たちの闘いの頂点は一九七七年から七八年にかけての一一〇日間ストライキであった。鉱山経営者連盟は生産性の向上と組合からの譲歩の両方をめざしていたが、その譲歩は全米鉱山労組の福祉年金基金を破壊するだけではなく、他労組のビケを尊重することを禁止するなど組合の「伝統を破壊」するものであった。ウォールストリート・ジャーナルでさえ経営側が行き過ぎており、「頭を冷やす必要があるのは労働者のほうではなく経営側交渉者のほうだ」と考えていた。

組合員たちは提案された協約案を二回拒否した。二回目の拒否の後、ジミー・カーター大統領は「タフト・ハートレー法の反組合条項を適用して」労働者たちに職場復帰を命じたが、労

働者たちはストライキを続けた。「カーター大統領は炭鉱の政府管理を検討し、多くの鉱夫たちはこれを支持した」が、それは経営者連盟より政府のほうが交渉しやすいと考えたからであった。しかし、政府管理を「社会主義に向かう道」だとみなした炭鉱経営者の圧力を受けて、カーターは何もしなかった。タフト・ハートレー法による命令には効果がなく、「一週間で暫定命令が切れると連邦裁判所判事はその更新を拒否した」。鉱夫たちはわずかな差で三番目の協約案を認め、職場復帰した。鉱夫たちは自分たちの組合の「ばかげた権力構造」に打ち勝ち、政府に反抗し、「経営者を屈服させた」（一九五頁）。

しかし、闘いの基本的な力学は継続していた。ストライキが終わって一ヶ月も経たない内に二つの炭鉱事故により八人の鉱夫が死亡し、「新しい協約のもとでの初めての大規模な山猫ストライキが発生した」。ミラー委員長が辞任し、ボイル元支持者に権力を譲った。四年後にリチャード・トラムカという組合スタッフの弁護士が全米鉱山労組の委員長に選出された。

ナイデンによると、長い七〇年代の鉱夫たちの闘いは、一般組合員の運動とその担い手たちが職場と組合を変革する力を持っていることを示した。悲劇的なことに、新しい指導者たちは鉱夫たちが生み出した可能性を無駄にってしまった。下からの一般組合員の力を強化するために組合を再編するかわりに、新しい指導部は

MFDを解散し、運動は終わった、と宣言してしまった。鉱夫たちの民主化運動の約束は果たされないまま残っている。組合指導部が「一般組合員の独自の戦闘性を育てる」ことをしたらどうなっていたのだろうか？ たとえば、一九七六年の大会で鉱夫の代議員たちが協約案を共同して書いた事例はウォール街占拠運動で使われた参加型組合運動の新しい形を想起させる。しかし、ナイデンはその可能性を探求することなく終わっている。

怒りの源は深く、MFDが無くなったずっと後になっても、鉱夫たちは行動を取り続けたが、その運動を持続するための一般組合員の組織を欠いていた。この教訓は他の改革者、とくにチームスターズ組合員には忘れられることはなかった。彼らは長い七〇年代を生き抜き、今日まで継続している唯一の改革組織、TDUを作ったのだった。

二大政党制への革命から

鉱夫たちの闘いから明らかなように、一般組合員の反抗を労働者階級に向かった学生急進的活動家の仕業と見るのは間違っている。この誤りは学生が登場する前から労働者が示していた自己組織化能力と独立した思考を過小評価し、イデオロギーの担い手としての急進的活動家の役割を過大評価している。『反抗する一般組合員』のなかでダン・ラボッツの「七〇年代の

チームスターズ労組の動乱」だけが、最後の大高揚に参加し支えた急進的活動家の一世代の貢献を正当に評価しようとしている。

長い七〇年代の初め、チームスターズ労組は米国で最大、最強の組合だった。同組合は「アメリカのビジネス・ユニオニズムの中で、多少腐敗していて、より戦闘的だが驚くほど成功した例だった」とラボッツは書いている。三〇年代の運送業の成長と攻撃的な組織化手法によりチームスターズ労組は全国的に組織化し、反組合的な南部でも組織し、同労組に「目覚ましい経済的力」を与えた全国標準貨物運送協約（NMF A）のような全国協約、地域協約、市域協約を締結した（二〇二頁）。

チームスターズ労組は決定的弱点を持っており、それは次第にひどくなっていった。労働組合内部への組織暴力の浸透であった。全国段階の年金基金はコーザ・ノストラに支配され、いくつかの大きなローカルはマフィアに支配されていた。反対派は暴行を受け、殺されることも覚悟しなければならなかった。一九五七年までには世論と政府からの圧力によりチームスターズ労組はAFL-CIOから追放された（二〇四頁）。一九五九年には連邦議会は労働管理報告公開法（LMRDAランドラム・グリフィン法）を成立させ、政府が組合の腐敗と闘う新しい手段となったが、同時に二次ボイコットなどのチームスターズ労組の常用戦術を制限するものでもあった（同法が保障している組合員の

民主的権利の保護は、労働運動の中でのすべての一般組合員の反抗にとって、組合改革を闘うための決定的な武器となった。この点は『反抗する一般組合員』の中に独自の章を設ける価値のあるテーマである。一九六七年にはチームスターズ労組の有名な委員長ジミー・ホファは収賄の罪で投獄された（一九八九年には同労組は連邦政府の管理下に置かれ、TDUと労働組合民主主義協会の圧力により初めての組合役員選挙が一九九一年に実施された）。

六〇年代中頃にはパレット、フォークリフト、ロングボディやコンテナの採用により運送業での生産性向上が図られた（二〇七頁）。全国標準貨物運送契約のような全国協約により経営側は交渉を調整するようになり、チームスターズ労組指導部が分解している間に優位に立った（二〇八頁）。

TDUに先行する大きな改革の試みが三つ存在した。「鉄鋼運転手友愛協会（FASH）」、「チームスターズ統一一般組合員（TURF）」と「プロフェショナル運転手会議（PROD）」である。全国標準貨物運送協約の中に要求が受入れられないことに怒った鉄鋼業運転手たちは六〇年代末に州兵や、チームスターズ労組が雇った暴力団を相手に一連の暴力的衝突を繰り返した。TURFは一九七〇年に全国的な改革組織として結成され、「有力なローカル指導者」、新たな組合改革コーカスや年金改革団体を含んでいた（二二一頁）。しかし、「最終的にはTU

RFは役職から外れた野心的な組合官僚の野望のための手段として機能するようになった」とラボッツは書いている（二二二頁）。PRODは組合指導部や政府高官が安全問題で行動するよう圧力を掛けるために結成された組織だった。PRODは一般組合員の反抗の中心テーマだった組合民主主義の大義に取り組んだが、「会社に対する戦闘的な集団行動については考えなかった」（二二三頁）。

一九七六年に結成された「組合民主化を求めるチームスターズ（TDU）」は「労働組合の中で根源的に異なる可能性」を代表しており、民主的改革と指導部の交替をめざすだけではなく、「組合指導部に経営者との闘いを強制するために一般組合員の恒常的な組織を作ること」をめざしていた（二二三頁）。この姿勢は先に紹介した国際社会主義者党の「下からの」戦略を基礎としており、改革者が役職に着いても一般組合員の組織を持続させる必要がある、というMFDの経験の教訓を反映していた。

TDUの中の社会主義者たちは職場へと「転換」した時からいくつかの課題に直面していた。自分たちの政治的見解と異なる労働者たちとのように本物の一般組合員の団体を建設するのか？ チームスターズ労組とTDUの中で人種や性別を超えてどう組織するのか？ TDUのメンバー、とくに「組合官僚制」を独自の社会的層として捉えている者にとっては組合役職に立候補することの是非。これらの問へのTDU

の回答は現実的で効果的なものだった。TDUはその民主主義と改革という基本的な目標を共有するすべての政治的傾向の組合員に開かれていた。「チームスターズ組合員の配偶者」も正会員として受け入れ、運営委員会にも入っていた。有色人種の組合員もTDUとその指導部に最初から含まれ、組合内およびTDU内の人種差別主義は批判された。ローカル段階、そしてやがて全国段階での役員選挙に立候補することはTDU戦略となったが、一般組合員の恒常的な組織を作るという大きな目標に対しては二次的な目標に留まった。

急進的活動家にとってはこれらの問は、自らの動機である社会主義的政治を表明する課題と、日常の活動の決定的に非社会主義的現実とに関わるものであった。このような問題についての意見の違いが早いうちから派閥的な争い、排除、分裂を引き起こしたが、それはTDUの中ではなく国際社会主義者党の中であった。七〇年代の大高揚が収まるにつれ、国際社会主義者党も衰退し、TDUの中の国際社会主義者党員は「TDUの中で指導的役割を果たし、同時に国際社会主義者党を建設する役割を同時に担うだけの人材と財源を持っていなかった」（二二〇頁）。TDUの中の国際社会主義者党員たちは「すぐに社会主義的なプロバガンダを展開する試みを事実上放棄し、社会主義に向けて党員を勧誘する試みを止めてしまった」。ストライキの波が引くにつれ、TDUの活動の焦点は

ローカル段階の職場闘争から「全国的な協約運動、民主主義的課題をめぐる組合内での組織化、ローカル役員選挙に移っていった」(二二〇頁)。ストライキの波の頂点で闘いに加わった活動家たちは長い期間にわたる闘いに備えていった。「T D U」の活動は一層、組織化され、専門化し、効果的なものになっていった。T D Uは全国オルグと専従を雇い、N P O組織を作った。教育や法律扶助活動に資金を集めることができるようになった。T D Uは複合組織的な構造を持つようになり、一部ではN P O組織であり、一部では会員組織である。全国オルグと専従が戦略や戦術を立てるうえで決定的な役割を果たしているが、しかし組織としてのその存在は、運営委員会への一般組合員の参加と指導力、そしてチームスターズ労組中のローカルの中のT D Uグループの存在に全面的に依存している。T D Uの中心的な任務は「民主主義のための草の根の運動を不断に活性化」させることである(一九九頁)。

長い七〇年代の後、チームスターズ労組と労働運動全体の中のT D Uの重要性は高まった。一九九一年にはT D Uが支えたロン・ケアリーが委員長選挙に勝利して委員長に就任し、九〇年代で勝利した数少ないストライキであるU P Sストライキを一九九七年に指導した。一九九九年の「シアトルの闘い」での「チームスターズと亀」の共闘で指導的役割を果たしたのはT D Uに指導されたチームスターズ労組ローカルだったし、今日ウォール街占拠運動と一番近いつながりを持っているのはT D Uが強いローカルである。

T D Uは「急がば回れ」の古典的な例である。国際社会主義者党の急進的活動家たちは革命的な社会主義政党の労働者幹部を作ろうとして階級的組合運動を始めたが、チームスターズ労組の一派支配の中に第二政党を築くことになってしまった。T D Uが「チームスターズ労組の狭い経済的課題と組合民主主義という狭い」問題に焦点を絞ったことは、国際社会主義者党の急進的活動家たちが社会主義の目標を放棄した証拠として見る事ができる。ラボッツはその放棄が一時的なものだとしているが、恒常なものかも知れない。しかし、T D Uに関して興味深く大切なことはその過程でT D Uが何を学んだかである。多くの教訓の中で一番重要なのは、民主主義の問題は権力を勝ち取ったり、組合官僚に経営者と闘うよう強制する武器としてだけ重要なのではなく、労働者運動の生きる糧として、その再活性化の可能性の条件として重要なのである。労働者が民主主義を最大の関心事だと考えるのは偶然でもなければ、「虚偽意識」の表れでもない。T D Uは「労働者の年金を守り、より良い協約を勝ち取り、そして何よりも民主主義のための闘いの戦場に立ち続けて」いるが、その「力を持続しているのは、職場での組合での、そして社会での労働者の力のための闘いにおいて労働者を導くためにこの組織は作

DVD BOOK

**労働のリアル、を描き出す
迫真のドキュメンタリー**

フツ-の仕事がしたい

常識はずれの過酷な労働…。ある青年の生き残るためのたたかい。

土屋トカチ = 監督作品

本編70分+特典映像43分+解説ガイドブック

フツ-に働き、フツ-に生きること。それを取り戻すための闘いの記録に、ものすごく大きな勇気をもらった。

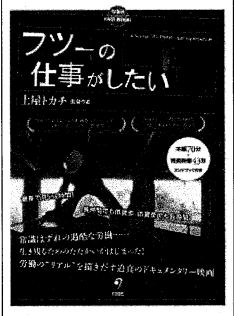
雨宮処凛 (作家)

「フツ-に働く」ための道筋を、感動的に、理論的に示している。働く者たちが過酷な時代を突破するために必見。

木下武男 (昭和女子大学特任教授)

英国レイダンス映画祭・
UAEドバイ国際映画祭・
ベストドキュメンタリー賞

受賞作品



定価3,360(税込) ISBN978-4-8451-1254-8

旬報社

〒112-0015 東京都文京区目白台 2-14-13
Tel: 03-3943-9911 FAX: 03-3943-8396

<http://www.junposha.com>

られたのだ、という設立の趣旨によるところが大きい」とラボッツは語っているが、一般組合員戦略の根源的な矛盾をついている（下線は引用者）。

結論

『反抗する一般組合員』の最後はステイーブ・アーリーの評論であるが、彼は元全米通信労組の本部代表でありジャーナリストで、その労働運動活動暦はMFDの勝利の後に全米鉱山労組のスタッフになった時に遡る。アーリーは最後の大高揚の総括を行ない、今日の労働運動活動家にとっての教訓を明らかにしたうえで、七〇年代の一般組合員戦略が長年にわたり、TDU、レイバーノーツ、ニューディレクション、雇用に正義を運動^③などの多くの運動の活動家たちにより維持され、発展させられてきたことを明らかにし、それが全米サービス従業員労組（SEIU）のような「官僚的企業的労働運動」に対する解毒剤と代替案になっていると主張している。

アーリーは組合民主主義の長年にわたる提唱者であり、ルース・ミルクマンやステイブ・フレイザーのように組合民主主義を軽んじる人々を厳しく批判してきたが、彼にとって組合民主主義は「真の組合の力」を築くための鍵である。しかし、この一番大切な地点でアーリーは旧い国際社会主義者党の枠組みに回帰してし

まう、組合民主主義が重要なのは「労働者が雇い主に対する闘いのための有効な組織に組合を変える唯一の方法」だからである（三五八頁）。「一般組合員が民主主義の拡大を求めるのは労働者の雇用主に対する直接的な経済的利益の表現である」（三五九頁）。マルクスがかつて「死者は生者を捉える」と言ったように、旧いイデオロギーが新しいイデオロギーを妨害する。

ここでウォール街占拠運動に立ち戻り、ウォール街占拠運動の「持続する力」を文字どおり問わねばならない。ウォール街占拠運動が『反抗する一般組合員』から学べるのは、労働者の最後の大高揚の豊かな検証であり、「下からの」急進活動家たちが根源に立ち返り、そこに長期にわたって留まり続けた大切な遺産である。逆にウォール街占拠運動が教えることができるのは、戦闘的な集団的行動により民主的で平等な自己組織化のための空間を作る、現実的な実践例である。議論、アイデアの探求、独立的な思考、連帯と行動のための空間を作ることである。労働組合に一番欠けているものは運動であり、集団的行動を自らの課題として引き受ける労働者の参加と関わりである。ウォール街占拠運動やその全員集会、作業グループに見られた真の民主的な参加の育成こそ労働陣営が再出発する必要がある地点である。

【参考文献】

・ Cochran, Bert. Labor and Communism: the Conflict

that Shaped American Unions.

・ Princeton: Princeton University Press, 1979.

・ マット・ノイズ／山崎精一訳「米国の社会運動ユニオニズムと「新しい労働運動」の考察」労働法律旬報 一五九四～一五九六号（二〇〇五）。

（1）国際社会主義者党は全米自動車労組、全米鉱山労組、チームスターズ労組、全米鉄鋼労組、教員労組など多くの組合で活発だった。他の二つの団体と合併してもっと多元的な「左翼再編」組織ソリダリティを結成した。筆者は一九八九年に学生・労働活動家としてソリダリティに加入した。

（2）トラムカは二〇〇九年にAFL-CIOの委員長に選出された。

（3）ニューディレクションは多くの組合に存在したコーカスであるが、一番成功したのはニューヨークの都市交通労組（TWU）ローカル一〇〇である。雇用に正義を運動は労働組合、宗教団体、学生団体、地域労働共同団体の全国ネットワークである。 www.JWJ.org

（4）私の前掲「米国の社会運動ユニオニズムと「新しい労働運動」の考察」はこの戦略に対する批判である。

Matt Noyes

やまざき せいいち